

桃源郷異聞

吉岡 省二

寂庵の玄関内に飾られていた揮毫、『桃源郷はここ』。見る人を、ほっこりあたたかい気持ちにしてくれるその文字は、哲学者・梅原猛さんによるもの。この作品が寂庵に収まったと聞いたご本人は、「お茶屋に買われなくてよかった」とおっしゃったとか。納めたのは京都市内のZ画廊。当時の顛末を（寂聴さん）どこかに書かれていたように思うが）、何かの因縁か、同画廊の店主から聞く機会に恵まれた。

その画廊は、祭見物で家族と宿泊していたホテルのすぐ近くにあった。早朝に一人で散歩していると、気になる作品が垣間見え、滞在中に訪ねたのが初め。以来、様々なア―

トとのご縁をいただいている。関西への機会があれば立ち寄り、都内でのアートフェアに呼んでもらったり、推し作家の展覧会への旅をご一緒したり。そんな中、仕事で寂庵を訪ねた帰りに寄ったところ、それまでは全く知らなかったのだが、店主が寂聴さんとは旧知の仲と聞き、思い出話をいろいろと伺えたのだった。

前述の梅原さんは、こちらの店主にとって、その業界に立たせてくれた恩人のような方。店名のロゴも梅原さんがしたためたものだという。その字に惹かれた店主が、揮毫作品に仕立てるといふ閃きを得て、催した展覧会は大盛況。そこへ現れたのが、他ならぬ寂聴さんであった。

店内を一巡した寂聴さんが、最も気に入って「買いたい!」とおっしゃったのが冒頭の『桃源郷はここ』であった。したり顔の店主に促され、おもむろに名札を裏返した寂聴さんは絶句。そこには「瀬戸内様 売約済」とあったのだ。「うそ! どうせ、全ての札に書き入れたに決まってる!」他も裏返してみるものの、売約済とあったのはその一点のみで、感服してお買い上げとなった。

店主は当初、この作品を非売品にするつもりだったらしいが、聞き入れてくれそうにないのが寂聴さん。事前に、「きっとこの作品」と予想し、書き込んでおいたのだという。

こんな逸話も聞いた(店主の思い出し怒りとともに)。

寂聴さんが古い仏画を入手され、その額装を「あなたの新しい感性で」「すべてお任せする」「一切文句は言わない」と依頼されたという。しかし納品後、周囲数人から否定的な感想を聞いた寂聴さんが、深夜に何度もお怒りの電話をかけていらしたとか。

しかし、店主も負けてはいない。

「そんな素人の感想に流されて! もっといろんな人に聞いて、一年後そんな声ばかりなら、また相談しましょ」と

無視したそうだ。

絶交して一年後、「久しぶり」と来店し、何事もなかったようにふるまう寂聴さんに、店主は「私はまだ許してませんよ! あんた、謝ってないし!」と塩対応。

しかし、寂聴さんも負けてはいない。

「まあまあ、一緒に写真撮りましょ。これで、仲直り〜♪」お人柄というか、流石である。

今年の早春、その画廊を訪ねたら、陳列窓に梅原さんの揮毫が飾られていた。

『福は内 鬼も内』

寂聴さん晩年の寂庵でも、そう唱えて豆を撒いたと聞く。店主が非売品として残しておいたものの、時季もよく、久しぶりに飾ったらしい。これまでの諸々は、きつと因縁尽? と思い、譲っていただいた。寂庵とは比較にもならない狭い拙宅だが、節分の頃には玄關に飾ろうと思う。出奔時に「大鬼になれ」と勘当され、見事な「大鬼」となられた寂聴さんの魂が、遊びに寄ってはくれまいかと、厚かましく期待していることは、私一人の秘密である。